

大阪私立中学校高等学校連合会長賞

『まあちゃん』

金蘭千里中学校 二年 曾根 そね 史央里 しおり

私の家族には、二つ上の「ダウン症」を持った姉がいます。「ダウン症」と聞いて言葉だけ知っている人や知らない人など、いろいろな人がいるかも知れません。ダウン症というのは言葉では説明しにくいのですが、先天性のもので周りの子より発育、発達が遅れていたりします。

私は生まれた時から姉の「まあちゃん」がいたので、障がいがあるだとか、周りの子と違うという違和感はありませんでした。障がいという言葉は彼らとの間に壁をつくっているようで嫌いです。ダウン症をもって生まれたことは一つの個性を持って生まれたことと同じだと思います。姉は心の表情が豊かで、一緒にいるととても面白いです。しかし、私が幼い時、恥ずかしいと思うこともありました。今では笑い事ですが、一緒に出掛けたとき、店に流れて

いる音楽に合わせて踊り始めたのです。姉はダンスを習っているので、踊ることが大好きでした。でも、そこに一緒にいた私は、周りの人の目が気になり、それを止めようと思いました。

小学校の時、私はよく学校から帰った後、家のトイレにこもって泣いていました。それはこんなことがあったからです。ある友達が、上手く話せない人や手足に不自由を持つ人の真似をしていたのです。また、それを見ていた周りの子達は笑っていました。私はとても悲しくなりました。理解されていないことが。少し気にしすぎたのかもしれない。母に相談したこともありましたが、「いちいち気にするな。」と言われましたが、笑い声が聞こえたり、真似しているのを見かけたりするたびに心が強く痛みました。そういう子達に何と言えいいのか悩みました。結局聞かえてくる言葉を耳に入れじっと耐えるだけでした。六年生のある日、その事を母は担任に伝えたらしく、先生は私に、真似をしているのは誰だと尋ねました。私は困り果てました。誰と言われても全員に言ってほしいことだったし、怒って分かるような問題ではないと思ったからです。だから私は少しは

ぐらかしてその場を立ち去りました。それ以来先生はその事について何も言っていなかったので、忘れたのだろうと思いました。もし、忘れるような軽い問題だと思っていたのであればそれは間違いだと思います。その時は受験もあったのでそれ以上は考えませんでした。

もう一つ困ることがありました。それは友達に兄弟について尋ねられることでした。困るべきではないのですが、一度、「お姉ちゃんがおって障がいがあるねん。」と答えた時、それを聞いた友達は「可哀想。」という顔をしました。あの時言った私の言葉に問題があったとしても後悔しています。「障がい」という言葉にキツさがあったのが一つの原因だと思います。ダウン症をもって生まれた子の中でも様々な子がいます。でも、豊かな心があること、みんな個性を持っていることは何も変わりません。一緒に笑い合う時間を共有したり、時には一人悩んで涙を流すこともあるでしょう。それは誰にでもありません。その暮らしの中で、自分らしさを発見したり、分からなかったことが分かるようになっていたりして成長していくことが大事だと思います。

今、「出生前診断」によってかなりの確率でダウン症であることが分かるそうです。つまり、子どもを産む前にダウン症であるかどうかということが、ほぼはっきりと分かるということです。ここまで発達した検査はあっていいのか正直分かりません。ただ、準備するという意味で受けるのであればそれは意義のあることだと思います。しかし実際は、陽性だと診断された人のうち、中絶を選択した人の割合はとて多いです。多くの理由は、「ちゃんと育てられるか不安」、「将来を考えると可哀想。」というものだそうです。「ダウン症」の子がどのような子であるかきちんと分からずにお腹の赤ちゃんを殺してしまう、そのようなことが実際起きているのが辛くてたまりません。どんな理由でも、中絶することは絶対に許されないことだと思います。子どもが生まれる権利は誰にでも公平に、必ずあります。これは綺麗事ではありません。「ダウン症」だから不幸、可哀想などということは決してありません。幸せかどうかは、その人の感じ方次第です。「ダウン症」を持って生まれた「まあちゃん」と共に成長することにより大切な事を学べます。不安や悩みを優しい

笑顔、面白い出来事で「まあちゃん」はかき消してくれます。だから、どうか、知らないからといって殺さないで、子どもができたことを喜んでと伝えたいです。

そして最後に、「まあちゃん」と私を生んでくれたお母さんとお父さんに「ありがとう。」と感謝します。